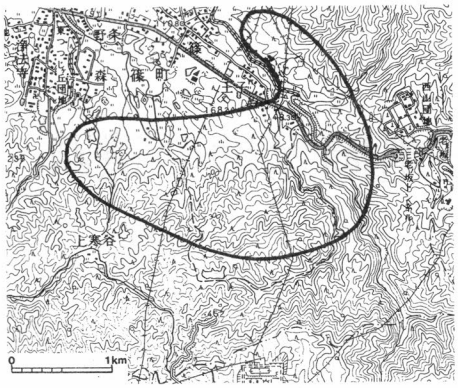
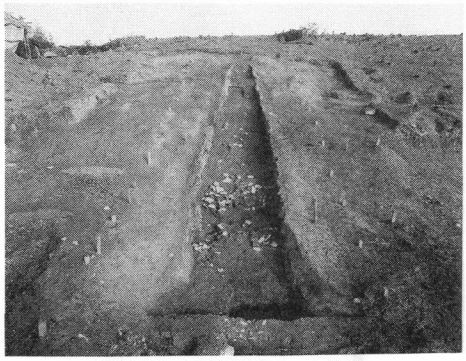
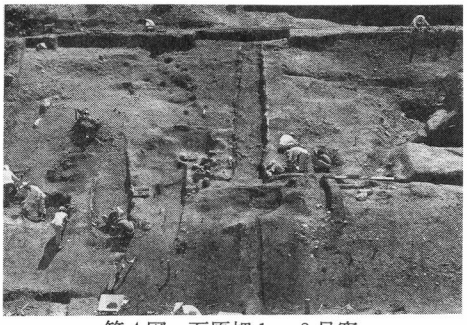


第１図　篠窯跡群の位置


第２図　西長尾奥２－１号窯

第３図　西長尾奥２－１号窯灰原


第４図　石原畑１・２号窯

篠窯跡群

はじめに　亀岡盆地南西部(亀岡市篠町)の丘陵一帯に散在する須恵器窯をまとめて「篠窯跡群」と称している。篠町森から王子に至る、東西3.5km・南北２kmの丘陵部一帯に広がり、奈良時代から平安時代後期まで連綿と続いた一大窯業生産遺跡である。京都縦貫自動車道老ノ坂亀岡道路建設に先立ち、昭和51年度から昭和61年度まで、京都府教育委員会と当調査研究センターが路線内の発掘調査を実施した。分布調査等により確認できた窯跡は97基を数え、総数は百数十基に及ぶものと思われる。調査の結果、須恵器窯跡22基(半地下式登窯16基・小型三角窯４基・ロストル式三角窯１基・ロストル式楕円窯１基)、窯状遺構６基、窯業関連遺構２か所等を確認し、操業期間が８世紀中葉から11世紀初頭まで存続すること、窯跡は８世紀から10世紀にかけて東から西へと築かれるという傾向がみられること、10世紀を境として登窯から小型平窯へと窯体構造が変化することなどが明らかとなった。また出土遺物(須恵器)の量は、整理箱約3,000箱に及び、緑の釉薬を塗った緑釉陶器や硯などを生産したことにより、長岡京や平安京と大きく関わりのある遺跡と考えられる。

登窯　登窯は16基検出している。その規模はおおむね、全長８m前後・最大幅1.2

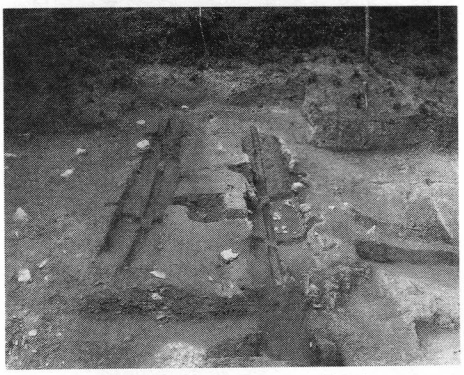
m前後、最大傾斜角30～45度である。全て半地下式に構築し、天井部・壁面をスサ入りの粘土で補強していた。この時期の窯は、器種・器形に統一化がみられ大量生産された時期にあたり、燃料の効率を良くするため焚口をハの字状に開き床面の傾斜は急角度となる。また、その操業も激しい燃料消費のため、樹木の豊富な丘陵へ短期間のうちに点々と移動する。窯体構築は、その9割が丘陵西斜面に築かれている。これは年間で降水量の少ない冬季には、乾燥した寒冷な北西風(シラニシ)が吹く、入り込んだ地形を利用したものと考えられる。

小型窯　小型三角窯4基・ロストル式楕円窯2基を検出している。小型三角窯とは、底辺の二隅に焚口を設け頂点を煙道とする特異な構造の窯跡である。前山3号窯では、底辺長1.8m、主軸長1.8m、床面傾斜角8度を測る。床面には径15cm大の窪みが21か所認められた。灰原は焚口2か所よりそれぞれ扇状に広がっており、灰原内より須恵器・緑釉陶器・分焔柱及び熱を受けた拳大の粘土塊が多数出土した。この窯跡については、緑釉陶器の焼成窯と考えられるが、施釉成形していない須恵器が供伴すること、壁面観察により焼成温度が1,000度以上に達していることなどから、緑釉焼成窯としてだけに築窯されたものでないことが判明した。

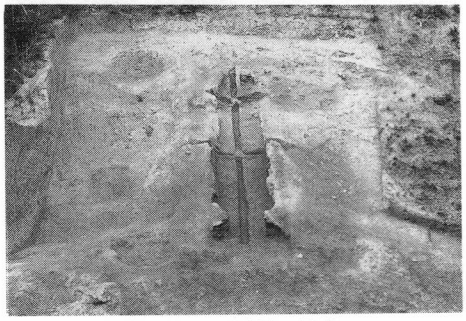
ロストル式楕円窯とは、小型三角窯と同様焚口2か所を有するが、平面砲弾形を呈し、焼成部床面が二重構造という特異な平

第5図　石原畑2号窯

第6図　石原畑3号窯

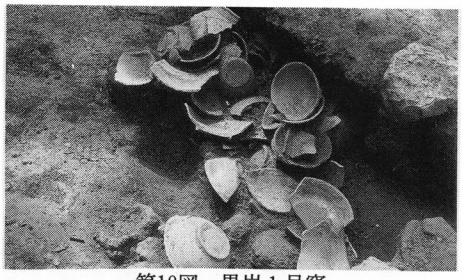


第7図　西長尾1・4号窯

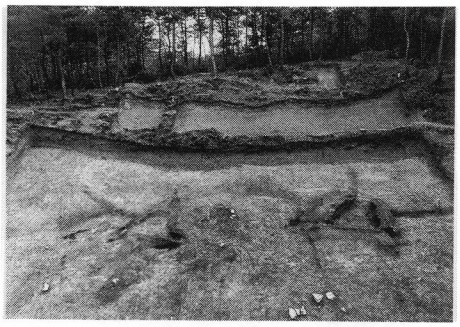


第8図　西長尾3号窯

第９図　黒岩１号窯



第10図　黒岩１号窯



第11図　前山２・３号窯

第12図　西長尾５・６号窯

窯である。西長尾５号窯は、長軸長2.25m・短軸長1.35mを測り、床面傾斜角は下部床面が10度30分、上部床面が８度30分を測る。焼成部は下部床面上に直径10～15cmの支柱を17本立て、その上面に拳大の粘土塊をわずかに隙間をあけ不規則に敷いている(上部床面)。上部床面には須恵器片が付着していたが、下部床面上には細砂が堆積するだけでありその間は火道と考えられる。焚口２か所から広がる灰原及び上部床面上からは、11世紀初頭と考えられる須恵器が多数出土した。ロストル型式の窯跡は瓦窯には見られるが、須恵器焼成窯では初見である。

これら小型窯の出現は、多数の工人が１基の窯に関与する操業体制から、少人数操業体制に転化したものと考えられる。

生産と流通　篠窯跡群では、丹波に国府・国分寺等の官衙が設けられた頃に生産を開始する。平安時代初頭、９世紀前半期になると、器種・器形が豊富になり、法量も定型化する。この時期が篠窯跡群の最盛期となる。10世紀を境として、土器製作技法上での変換期を迎え、ミズビキ成形・糸切り・ヘラ磨き等により、器壁は薄く丸みを帯びる。10世紀中頃、洛西石作・小塩窯より緑釉陶器の製作技法が伝播され、この時期より登窯から小型窯へと移行する。

出土した土器の代表的器種の消長変化から、西長尾奥１号窯跡→西長尾奥第２窯跡群１号窯跡・石原畑３号窯跡→西長尾１号窯跡→小柳１号窯跡→石原畑１・２号窯跡

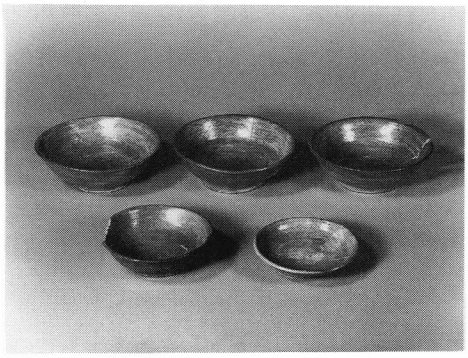
→西長尾３号窯跡→前山２・３号窯跡→黒岩１号窯跡→西長尾５・６号窯跡の順と考えられる。操業年代は、石原畑３号窯跡が８世紀第３四半期、西長尾１号窯跡は９世紀第１四半期、小柳１号窯跡が９世紀第２～３四半期、石原畑１・２号窯跡が９世紀第４四半期、西長尾３号窯跡が10世紀第１四半期、前山２・３号窯跡が10世紀第２四半期、黒岩１号窯跡が10世紀第３四半期、西長尾５・６号窯跡が11世紀第１四半期に操業していたものと考えられる。

篠窯跡群は、８世紀段階では丹波国府や国分寺等に製品を供給する一地方窯的な性格であったが、近接する長岡京や平安京が都になると一大生産地に変貌し、畿内周辺部に製品を供給したと思われる。特に、10世紀中頃に生産された緑釉陶器や鉢などは、平安京を中心として近畿以西に広く流通していた。

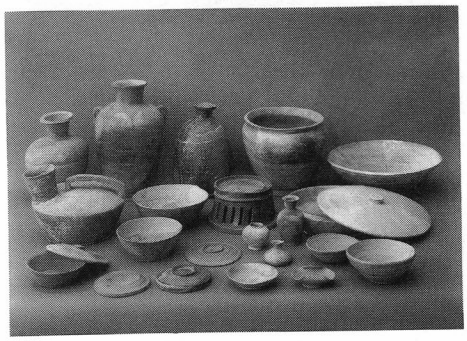
篠窯跡群の終焉　10世紀以降、篠窯跡群では、緑釉陶器の生産、鉢・椀を主体とした小型品の供給、燃焼効率を良くした窯の改良など繁栄するかにみえるが、窯の選地・原材料の不足とともに、一大消費地である平安京での須恵器需要の激減により、11世紀の第１四半期をもって終焉を迎えるのである。また須恵器工人は、藤原道長によって発願された法成寺造営（寛仁３年、1019年）を契機に、大堰川を挟んだ王子の瓦窯へと移動し、瓦生産に従事したものと考えられる。

（水谷寿克・岡崎研一＝当センター）

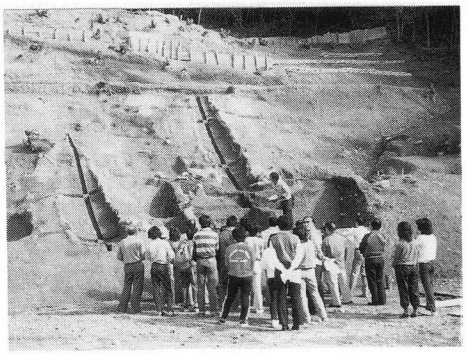
第13図　西長尾５号窯



第14図　緑釉陶器



第15図　須恵器



第16図　石原畑窯跡群